

地までの搬出は交代で行うものの極めて過酷な労働で傷病者続出し、当方もその調理に追われたが、試食を重ねて抑留前の体力に戻った。

隊長（砲兵大尉）の覚えめでたく、宿舎までの食事運びは所外への単独行で、部落住民とも接触でき、六か月でロシア語の会話もスムーズとなった。隊長が「残れ」我れは「好き好んでソ連に來たわけでない。早く帰してくれ」これが効いて半年でエラブカに帰れた。

十月中旬、農場でポテト収穫労働中呼び出して鉄道駅まで歩き、各地からの集合で一列車（往時と同じ）が組まれ、動き出した。行先不明での東方への移動にはシベリヤ奥地への転送も考えられたが、再び二週間の貨車送りでナホトカ着となり、帰還の可能性が強まった。

しかし、ソ連シンプの日本人による「共産主義に同盟せざれば帰さず」とのアジ怒号に囲まれ身のすくむ思いで待機していたが、洗脳には至らず十月十八日興安丸に乗船でき、船内での騒動もなく二十二日函館着、入港時米軍の検疫を受けたが何事もなく、元函館重砲大隊兵舎で復員手続きを終え、二十五日郷里札幌に帰還した。二

年三か月のソ連抑留生活は青春の一駒に過ぎないが、死との葛藤、苦難の連続はその後の人生に不撓不屈の精神を培った。

終戦よりウランバートルまで

鳥取県 真山 基

(一) 終戦より入蒙まで

私は昭和二十年八月十四日の終戦を中国（満州）の錦州（県）憲兵隊本部で迎えました。当時憲兵が不足していたので、承德から憲兵候補教育班付としての街の中にある青年学校で迎えました。校庭にコスモスの花が寂しくしぐれにぬれていたことを思い出します。

我々は錦州市民を守るため、巡察や警備歩哨についていました。巡察中の私の軍刀に日本のお婆さんが泣いてすがりつき「憲兵さん、私たちを助けてください。近日ロシア兵が入ってくるという」と言われた。「お婆さん心配しなはんな。我々がいるからにはきつと命をお守りい

たしますから」と言えば、老婆は「お願いしますお願いします」と涙を流して頭を深々と下げていられた。その後私たちはソ軍の武装解除を受け外蒙に抑留させられ、ついにあのお婆さんを裏切ったことになり、胸が痛む。あのお婆さんは、元気で内地に帰られたであろうか、今でも気がかりである。

憲兵の身の危険を隠すために錦屏の街の中にあつた八〇四部隊に編入された。近日ソ軍が入ってくるというので不穏な空気が続き、毎日焼酎やビールを飲んでゐた。早まった友は自殺し、ある憲兵曹長は妻子を殺し自分も自殺するつもりでいられたのですが、死にきれず生きてシベリアに抑留された方もあり、本当に罪なかわいそうなことをされたものと残念に思う。このころは明日の生命もわからないので、生死に迷い私も十四年式拳銃をこめかみに当て自殺しようと覚悟したが、そのとき機を失し、死ねなかつた。そのころ〇〇隊長（小林元彦憲兵少佐）は毎日のように精神訓話をされていた。その内容は「今自殺して死ぬことは大死に等しい。死ぬるときは隊長が命ずるからそれまで待て。また自分だけ一人死

んでいくことは利己主義者である。我々は敗戦の責任を受けあらゆる困難にも耐え、元気で日本に帰り再建するのが我々の使命である」ということをこんこんと説教された。その後、蒙軍第一戦舞台が入ってきて、治安が悪く、また今までの日本軍の友軍であつた。満軍が叛反を起し反乱し、満人の掠奪も目にあまるものがあつた。

また、阜新にある東洋一を誇る火力発電所の解体作業に日本人を強制重労働させ、昼夜交代でブインの音、けんけんごうごうの作業場でダワイダワイと追い使われた。このころより飢えを感じ、物々交換が始まり、時計、長靴、衣袴、手袋等とパン、たばこ等の交換が公然と行われた。

十一月二十日ころか、無がい貨車に装具とともに詰め込まれ、内地に帰すという。夜空にはおぼろ月が出て行先はわからない。奉天まで行けば南か北に向くかわかる。夜空は肌寒く、皆が無言のまま貨車にうづくまつていた。着いた駅は奉天である。

ところが、我々の予想を裏切つて列車は北に向かつて走り出した。もうだめだとあきらめた兵もいたが、未だ

羅新回りで船で帰るのだという。日本人は虫がいい。なにごととも善意に解釈するのである。列車はひときわ大きな駅に停車した。新京（長春）である。羅新回りにならここから東に向かわねばならぬ。ところがまた予想に反し北西に向かって走りだした。もうだめだ。奉天を出発したころより相当数の逃亡者が出た。将校の方も逃亡はなかば認めて黙認の状態であった。今逃亡して満領に逃げても生命の助かる保証もない。満人の日本人に対する反感を考へるとき「飛んで火に入る夏の虫」のごとく、早まる必要もない。人生はなるようにしかならない。天命に従うしか方法がない。大勢と行動を一にすることに決定する。

貨車の中は二段式にしてあり、毛布一枚で起居していた。途中水がなくてのがかわく。我慢できず、窓からひもに水筒をつるして満人より水をお金で買った。極限の生活になれば塩と水が一番必要であることもわかった。それにも増して大切なのは睡眠であることもわかった。逃亡者が多く、用便にもおろさなくなった。貨車の隅の板を切り抜き用便に利用した。ソ満国境が近くなっ

た昂々溪という小さな駅に列車が着いたとき、雪の上を走る一人の兵隊に向かって銃声が響いた。五十メートル先の雪の上にバツタリと倒れた。さらにソ軍歩哨二、三人が駆け寄り、近くでとどめの一発を発射して息を絶つた。真っ赤な血がふき出て白い雪を染めて列車は出発した。どこの何という兵かはわからないが、内地では肉親が待っているであろうにと思へば、かわいそうであった。

列車は興安嶺を登り国境を越へて広大なシベリアを走って行く。途中野犬かオオカミかめずらしそうに我々の列車を見送っていた。こうしたチタを過ぎ、途中乗りかえ、外蒙へ外蒙へと入っていったのです。時期は師走、昭和二十年も暮れようとしていたときでした。外蒙の国境を徒歩で渡るときは、雪がちらちら降ってきて、この世の地獄の三丁目に入っていくような寂しい感じでした。

(二) 外蒙首都ウランバートルの思い

アタン部落よりトラック輸送で着いた町が、外蒙唯一の都市ウランバートルでした。この町は外蒙の首都で

のちに映画「曉に祈る」の舞台となった場所です。周囲が山々に囲まれ、洋館建てもちょいちょい見られ静かな町でした。着いたときは十二月の年の暮れというのに、氷点下何十度まで下がる寒さで、雪こそ少ないが、強い風と寒さは北満を思い出させる。

アマグロンという穴倉兵舎に入りました。これは土の中に穴を掘り、そこに柱を建て屋根も土で埋めた兵舎で、一か所日のはいる窓はあるが、日中でも薄暗く一種独特の臭気がありました。

この穴倉兵舎で大晦日と正月を迎えましたが、正月とて食糧配給には変りなくアワ、コウリヤン、小豆、大豆のシャブシャブが主食でした。米はほとんど口にすることはなかった。

ここでの仕事は我々の自活の仕事で、便所づくり、まきづくり、石灰運び、炊事用水運搬等が主な作業でした。かわや（便所）は野外につくられ、大きな穴を掘り、それに板を並べ、一度に十人くらい用便できる露天のもので、空の星を眺めたり、前の戦友の尻を見ながら用を足していました。このかわやに行くのが唯一の自由な時間

で、東の方から上がる大きな月やきらめく星座を望めながら郷愁にふけり、故郷の親兄弟のことを懐かしく思い出し涙したものでした。また、あるときは前の友が脱肛で苦しみ、真っ赤な肛門が出たり引っ込んだりし苦しむ様子を見たときは驚きと同情心が湧きました。

三月か四月ごろと思うが、我が小林部隊に命令が下り、装具まとめてトラックに乗せられました。場所はウランバートルの北西に位置する山峡の谷間で、外務省建築が目的である。作業人員は小林隊長以下五百人くらいで、険阻の山合いを旧兵舎らしき建物に入りました。

その翌日より建築作業の柱の穴掘りが始まった。指揮系統は階級章ははずしていたが、軍の階級制が守られ、毎朝舎前に整列、点呼、隊長訓示、優秀者表彰があった。作業は穴掘り、伐採、石切り運搬、れんが運搬、れんが積み、塗装等であるが、直径五、六十センチ、深さ一メートルくらいの小さな穴でも、かちかちの凍土は鉄棒をはじき思うように掘れない。その上空腹では腹力が出ない。「腹いっぱい食べさせてくれたらなあ。仕事もするのだけど」と当時は思った。

仕事はすべてノルマ制で、一人の一日のノルマが課せられ、それだけはいや応なしにしなければ夕飯にありつけないのである。れんが運搬は三、四十枚背負い、三階まで走るようにして運搬する。その回数を日本軍元將校さんが記帳し、翌日点呼の際に報告、成績優秀者は表彰し、一回に掛けごうのふたで一杯のメリケン粉が増配されていた。個人ごとの成績記録はグラフにかいて兵舎の廊下に張られていた。

ある日、三日間雪の輸送のためか糧秣の配給が途絶えたことがあった。平素から少ない食糧の上、三日間の食は我々重労働者にはこたえた。食なくても作業は休めない。腹が減っては鉄棒も上がらない。力尽きて立っていれば、蒙古歩哨が銃尾でなぐりつける。力なくよるめき倒れる。敗戦のみじめさが頭をよぎるが、もはや反抗する元気もない。三日ぶりに食糧を積んだトラックが来たときには、皆が思わず「万歳」を叫んだものでした。ひもじさを耐えた私たちは、さかのぼって配給された三日分の食糧を一度に食べて満腹感を味わうのである。しかし、その後は決まっただけでかわや通いである。下痢と腹

痛に悩まされるのである。人が食べるとき、じっと我慢して人が食べ終わってから見せびらかして一人食べ快感を覚える人、同じ大豆の材料でもつぶしてだんに焼いて食べ満腹感を最高度に感じようと努力する人、いろいろである。「柳に雪折れなし」ということわざがあるが、そのとおりであると思った。

元気で無理をして働き、一番表彰回数が多い優秀者から先に倒れていった。くそ真面目な私も表彰十五回、ついに倒れてしまった。「これではいけない。自分の体は自分が大切にしなければ死んでしまう。夢の内地帰還もできなくなる、どんなに叱られても無理はしまい」という考えに変わって消極的になった。今までよい目で見てくっていた幹部も次第に白眼視するようになり、最優秀者の私ももう無用の長物となり、他の収容所に追放される破目になった。

いつも家の中の食糧、麦を煮た煮秣（にまぐさ）食のことを思いました。「あのにまぐさが食べたい」と何度思ったことか。このままでは重労働と飢餓と寒さで死は当然である。ある夜私は単独で隊の斬り込みならぬ食糧

調達に出た。降りしきる吹雪の夜であった。嚴重な蒙古警戒兵の網をもぐり鉄条網を脱柵し、向かいの山に逃れ、そこから五百メートル向こうに蒙古包（パオ）まで走った。見つければもちろん銃殺である。外からパオの中をうかがへば、老夫婦らしき人がいた。思いきって一人でパオの中にはいり、持っている手袋、靴下等の交換品を出したら、口に手をあて無言で肉やパン、菓子をたくさんくれた。交換は大成功で、喜んでいっぱいになったとうまい袋を担いで、私の安否をきずかい待たれてくれている班に無事帰った。他の班は深い眠りについていたが、私の班は平等に分けて腹いっぱい食べた。悪いことと知りながら「背に腹は変えられず」で皆喜んでくれた。

いい後は悪。翌朝点呼の際、隊長曰く「昨夜蒙古パオに脱柵交換に行った者がある。見つけ次第銃殺すると蒙古ゲープーウ（憲兵）より嚴重注意があった」と、誰か密告者があったのか、いまだにわからぬ。

それから私は、いらぬ者としてアマグロンの教化隊に追放され、最優秀者も要らざる者として捨てられたの

で、これから先、死の運命が待ち受けているのです。

(三) ウランバートルの思い出

ヌグテアンの建築現場より通報移動させられた私は、アマグロン教化隊に入った。後日わかったことであるが、このアマグロンには満洲の軍法会議の囚人や暴力団がたむろして、兵隊の糧秣をごまかして好きなように支配していた。ときたま広場で演芸会が開かれたが、親分肌の男が「男心」の歌謡曲を上手に歌い、自分まで男惚れした記憶がある。

ヌグテアンで疲労しきった私の体は、栄養失調の状態になっていた。それでも酷寒零下何十度の過酷な砂掘り作業に出なければならぬ。病弱者でも同じようにノルマは達成しなければ夕食にありつけない。寒さと飢えと疲労のため毎日二、三人の犠牲者が出て、あすは自分の番かと寂しい、心細い毎日でした。倒れた友だちをかわりそうにと担いで帰れば、途中でたいがい息を引き取った。友達でも顔をなぐり大声で叫びつつ帰れば助かった。

防寒帽の毛が白く雪花が咲き、花や手足の先が油断す

れば真っ白くなる。これは凍傷にかかっているのです、すぐに手で強くこすりもとに戻さなければ腐敗してしまふ。手足が腐って切り落した友も多くいた。

ある日入蒙以来初めてもみの配給があった。うれしかったが、精米機がないのですぐ炊けない。飯ごうの中で棒でついてもみ皮をとるのであるが、思うようにはげない。せわしないから三分の一くらいまでもみのまじった米を炊いて食べた。弱った体であるから、翌朝からかわや通いである。診断を受けてもなかなか休ませない。体を衰弱しているのに無理に作業に出るので、下痢は悪くなる一方、ねん液が出てしぼり腹になり、血便が出だした。汚い話ながら、肛門にしまりが全然なくなり、もうろうとしてわからなくなるまでになっていた。とうとうアムラト病院に入院させられた。内心「助かった」とホッとしたと思う。入院した当時の担当医の竹田ひろし軍医（横浜在住）のいわく「もう手遅れだ。もう少し早く入院してればなあ……真山君、内地に帰りたいから、石にかじりついても食いたい気持ちに勝たなければいけない」と。現に私とあとさしで寝ていた友達は、夜

半衛生兵の捨てた残飯をむさばり食べてその朝眠るよう死んでいった。

私はこの竹田軍医の言葉を神の言葉として忠実に守り、「食いたい食いたい」という食欲を抑さえ我慢した。おかげでめきめき快方に進み、丙食より乙食、乙食より甲食となり、晴れて退院することができたのは、軍医さんのおかげと思いい感謝している。亡くなられたこの戦友の名前は忘れたが、心から冥福を祈りたい。

十一月ごろであったろうか、これからつらい冬がくるのに未だ腹も全快はしていなかったが退院させられた。次から次へと入院患者があるので、病室の都合で退院されたと思う。

今度移転した収容所は、ウランバートルの街中にある収容所で、作業は砂掘作業である。私は砂掘作業の分隊長を命ぜられ、毎朝まだ暗いうちに作業に、夜は星空を眺めながら帰った。

ある朝作業整列し点呼を受けたら、一人自分の分隊員が足りない。驚いて兵舎に帰り呼びに帰った。呼んできてもさっきの門まで来てみれば、作業隊員は出てしまった

あとであった。仕方なく残留していた。ところが十時ごろ残留者は事務室に集合がなかった。事務室前には一台のソ連高級車がとまっていた。事務室に入ってみれば、残留車は十二、三人くらいいたであろう。ソ連の高官らしき人と通訳が一人々々に残留の理由、身体状況を聞いておられた。自分の番がきたので、今朝の出来事を話し、仕方なし残留していると言へば、「よし、お前一人」それでも一人は北海道の佐藤君の二人が選抜され、すぐ装具をまとめて乗用車に乗せられた。行先はもちろん知るよしもない。分隊員の友達には何も挨拶もせず出たので、作業から帰られて驚かれたことと思うが、当時はいたしかたないと思う。まるで狐につままれたようで、後日これが私の死より生に救ってくれた運命の日であった。

約三十分で着いたところ、ウランバートルの町の中にあるアパートで、前に学校があった。案内された部屋にはいって見れば、驚くなかれ日本人が五人みな洋服を着ておられ、収容所の捕虜とは違うことは一見してわかった。あとで話を聞いてみれば、四人はソ連領事館の高官

と、その夫人の洋服を縫っておられる洋服屋さん、もう一人は領事館の雑役夫とガレージの運転手兼用の方である。その方たちに私たち二人を紹介してくれ、今日から領事館のボイラタきとしてロシア人の補助役として使われるわけである。翌日の晩より二人が交代で勤務した。我々二人には給料はつかず、帰る日までこの五人の方たちに養っていただいたことになり、心より感謝している。

収容所生活と違い、自由にロシア人と一緒に勤めていたので、パン、肉が手に入り、食べさせてくれるし、収容所の皆さんのことを思えば、済まないと思うほどよい暮らしであった。灰捨ての仕事は地下よりネコ車で一気に上げる力のいる仕事であったが、食糧がよくてめきめき体力がつき元気になった。

この領事館の極楽生活のことは省略しますが、実際したソ連人はお人好しが多く、肝っ玉が太く、パンの一片の半分はタワラシチ（友人）と言って分けてくれた。

ボイラー事件、水揚げポンプの齒車に外套をはさまれ、あわや一命を捨てるところ。また領事館よりいただ

いたウイスキーをメーデーの日に飲んで蒙古歩哨と口論となり、そのあげく蒙古大統領とソ連大使との口論まで発展し、ご迷惑をかけたこと等、思ひ出は尽きない。

いろいろ思ひ出は多くあるが、四十五年経過した今、静かに目を閉じて過去を思ひ出すとき、いろいろのことが昨日のように頭中を駆け回る。今まで交換した度胸の広いロシヤ人お人好しには好感が持て、一人として我々を捕虜として見なかったことはうれしかった。

特に私を感じていた従来のソ連は、鉄のカーテン、秘密の国、恐ろしい国と思っていた。しかしロシヤ人と日常接してみて、それは間違っていたと思う。それはロシヤ人は一番ワイナー（戦争）を恐れ嫌っていたことです。ワイナーはプロホ（悪い）と言っていました。また「真山、日露戦争はロシヤが負け今度は勝ち、今五分五分だから、もう戦争はやめよう」とも申していた。

また給与が悪いとき、その改善を要求すれば、「おれのおじさんは日露戦争のとき、日本の捕虜となり、死んだ馬の肉を食べさせられた。だからお前たちも我慢せよ」と言われたときは二の口が出なかった。

わたしの昭和

鳥取県 村川 豊

モンゴル俘虜（ウランバートルは蒙古の首都、海拔二千メートルくらいの高原地帯。北緯は北海道の最北より北）

バイカル湖南岸のチタ駅より三、四か所先の名もなき駅付近一面雪野原の中で列車をおろされ、握り飯一個、たくわん二切れを昼食にその後行軍、何キロ歩行したか、踏切の遮断機のような大きいところで休憩。手前にか所（ソ連側）百メートルくらい先に一か所（蒙古側）嚴重な人員点検をしてモンゴルに行軍す。双方に兵隊が五、六十人（国境というところを初めて見て驚いた。）夜通し歩き次の日の夕方に初めての部落に着いた。零下数十度の中、その間食事なし、一泊し朝食後トラックにて輸送、途中大きな倉庫のような建物の中で一夜を明かす。次の日、再びトラックにて輸送、飛ばしに飛ばして